〃図会もの〃再説

――「頼光朝臣勲功図会」など――

横山邦治

一

〃図会もの〃と、私に名付けた読本の一群のあり様については、すでに説いたところであるが(注一)、その特色とすべきを再説すれば、一に名所図会のあり様を摸した大本という体裁にあり、二に直接的に摸本とした先行文学作品を有することであり、三に主として上方作者によって執筆され、上方で出板されたことであった。

これらの図会ものは、秋里籬島を主要作者とする寛政末年から文化初年にかけての前期と、山田意斉を主要作者とする文政から幕末にかけての後期とに分けて説くを便とする。それぞれ江戸における読本の消長と相関連して出現しているは、すでに説いたごとくである。すなわち前期における図会ものは、江戸における読本の盛行に対抗する目的で、上方書肆が種々企画した試みの一つとして、後期における図会ものは、江戸の読本が衰微に向う過程において、再び上方書肆が読本出板の出導権を握ろうと、既成の企画を再採用するという形での試みの一つとして、それぞれの時期に姿を現わしたものであった。

ところで、これらの現象よりやや異質と思われる現象がないわけではなかった、そのことについて一二ふれてみる。

二

刊記には出板年時を記していないが、前編序文に嘉永辛亥（四年）の年時が著してある「頼光朝臣勲功図会」と題する図会ものがある(注二)。その作者は、本文巻頭に〃東都　松亭中村定保輯録〃とあるによって判るごとく、江戸の作者松亭金水である。出板書肆も、見返しに

浪花　岡田群玉堂
東都　稲田金幸堂　合梓

とあり、巻末刊記に

京都寺町通松原上ル　菊屋七郎兵衛
大坂北久太郎町心斉橋北　河内屋喜兵衛
同心斉橋通博労町　河内屋茂兵衛
江戸日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
同所四町目　須原屋佐　助
同浅草茅町二町目　須原屋伊　八

書林

同芝神明前　　岡田屋嘉　七
同本石町十軒店　　英　大　助
同日本橋通二町目　　小　林新兵衛
同　所　　山城屋佐兵衛
同馬喰町二丁目　　菊屋幸三郎　板

とあって、三都書肆合梓の形であるが、板心に〃金幸堂蔵版〃と見え、序文に〃書肆菊幸新ニ刻シ二頼光朝臣紀事ヲ一求ム二題言於余ニ一〃との記事も見えるので、江戸の書肆金幸堂菊屋幸三郎が企画し出板したものに相違なかった。とすれば、いわゆる上方製と定義した図会ものとは異質のものが含まれているといえ、事実子細に検討していくと、種々不審な点が見出せた。

まず板型について検討してみよう。体裁は他の上方製の図会ものと同じく大本であったが、板型は半紙本と同じものであった。上方製の図会ものは、体裁だけでなく板型も半紙本に比べるとやや大きいのである。一般的にいうと、大本は縦十九・五糎前後、横十四・五糎ぐらいの板型であるに対し、半紙本は縦十八糎前後、横一三糎前後ぐらいの板型であって、この「頼光朝臣勲功図会」の板型は、縦十八・五糎、横十二・八糎ぐらいであるから、当然半紙本型といってよかった。要するに、半紙本型の板木を彫っていたのであるが、出板に際して大本型に仕立ててしまったということである。中本ものとして出板したものを半紙本に仕立てて売り出した例は数多いのであるが(注三)、これとて初刷本からそうしている例は僅少で(注四)、ほとんどが再刷の場合の例であって、やはり板型と異なる形式で仕立てて売り出すのは異常なことといってよいであろう。

次に題名のことを検討してみよう。見返しに〃頼光勲功図会〃とあり、序文の初めに〃題二頼光朝臣紀事一〃とあり、文中にも〃書肆菊幸新ニ刻シ二頼光朝臣紀事ヲ一〃と見え、目録・巻首などには〃頼光朝臣勲功図絵〃とあり、それぞれ一定していないけれども、一応源頼光の事蹟を記述したという印象を与える題名という点では一致していたが、本文は目録を一見しても判るように、必ずしも頼光の事蹟を記述したものではなかった。前編は〃巻之壹　第一　満仲朝臣住吉参籠附多田の城を築く〃から始まっていて、一応頼光出生から始まっているのであるが、後編の巻二の後半　〃第卅三　頼義朝臣射芸名誉附頼光卒去四天王等が傳〃において頼光の死を記してからは、全て頼信・頼義の伝を記するに専念している有様であった。

後編の目録の末を見ると、

嗣編ハ則これに続き前九年の闘戰にて頼義朝臣父子の勲功洩すことなくこれを綴り猶其嗣編に至りてハ後三年の軍記を輯む

とあって、これには続編、続々編とあり、ますます頼光の事蹟とは無関係な前九年・後三年の役の軍記が展開するようであった。とすれば「頼光朝臣勲功図会」の続編・続々編というのではあり得ない、が後編巻末に

撰者金水伏て言す。是より末第三編の。上帙に至ってハ。奥州前九年の合戰にて。将軍の良智諸士の軍労。挙て是を漏すことなく。引続て義家朝臣。後三年の戰ひにいたる。世人のよく知る所にして。贊言无益に似たりといへども。其異同を考へ実記を訂し。後世亀鑑ならしめんとす。作者が微忠を想像て。尊覧の程を希ふ

と記す、この「頼光朝臣勲功図会」は第二編ということになり、不審は深まる。この疑問は、柱心に

源氏一統志二輯巻之〇　金幸堂蔵版

とあるによって氷解する。「頼光朝臣勲功図会」なる本は元来存在しないはずで、「源氏一統志」という本の第二輯として執筆されていたものを、何らかの事由によって執筆時の題名を出板時に改題したわけであった。で題箋とか見返しとか目録・巻首、巻尾などなどの題名は彫り直したのであるが、柱心や目録・巻末の本文やには、執筆時の痕跡が残ったわけであろう。

とすれば、この「源氏一統志」という本は、どのようなものであるかというのが次の問題である。

三

山崎麓編の「日本小説年表」の読本の項を検すると、

源氏一統志　一〇松亭金水　天保十年

というのを見受ける。天保十年刊本は未見であるが、巻末刊記に

江戸松亭中村源八郎定保輯
江戸北斉為一老人八右衛門画
浄書　一貫斉金交
剞劂　朝倉伊八刀
弘化三歳宿丙午春二月吉辰発行
京都書林　寺町通仏光寺角　河内屋藤四郎
大坂書林　心斉橋筋博労町　河内屋茂兵衛
江戸書林　馬喰町弐丁目　菊屋幸三郎

とある前編五冊本を見得た。序文は天保十年となっているけれど、再刷本によく見られる摺の悪さとか製本の雑さなどが見受けられず弘化三年刊本ではあるが初刷本かと思われるものであった。年表に天保十年刊とあるのは、嘉永三年刊の後刷本の序文を検することによって決定されたもので、弘化三年というのが初刷本の出刊された年であったかも知れなかった。

それはともあれ、弘化三年刊本の「源氏一統志」は、板型はもちろん半紙本型であり、書型も半紙本型であって、表紙の色彩などからも外形的には江戸読本の特性を全て備えているものであった。また作者が松亭金水、画者が北斉為一、出板書肆も金幸堂となると、全ての点で江戸前の読本ということになる。そして題箋などには明記していないけれども、巻頭の目録に

源氏一統志初輯　目録

と見え、幕末期読本の一般的風潮となっていた続きもの読本への志向が明白に見えていた。後編巻末を見れば、その点一層明白に見受けられたであろう。

内容を検すれば、凡例に

此書ハ前太平記本朝通紀歴代備考国史略等の諸書を参考して多く誤謬を訂し。且年歴異同あるをばその所に弁じたれど卑陋の臆見また過ちなき事あたハず後の博覧尚正し給ハゞ幸甚ならん

とべ述、さらに

本書往々その綽の似たる所へは和漢の古史を引用して弁じたる処屢ありといへどもこの書ハ元来大部を縮て簡易ならしめん

ことを旨とすれバ夫等ハ省て載ざるなり且宜旨牒状の類或ひハ公卿致仕の表等多くハ其事実のミを挙て其文章をバ漏したり頗る遺憾に似たりといへどもそハ文辞の巧拙を味ふが為にして幼童婦女子に解易からず因て今干茲省けり看官必ずしも怪給ふことなかれ

という、執筆態度や方法など明らかに示されているといえよう。ただ参考書目を多く挙げていて、いかほどか金水自身の努力の跡がうかがえるがごとくであるけれど、実際は通俗史書の一つ「前太平記」四一藤本元亨和三年刊 を唯一の底本として祖述したものといえるようであった。文章そのものは、〃幼童婦女子〃に判り易くするという配慮によるのか、「前太平記」に見られるやや詰屈な漢文調は姿をひそめており、いかほどかその面影を残しながらも、冗長さの勝った読み易い文章となっている。そういう点では、金水の手が相当加わっているともいえるのであるが、章立てやら話の内容やらは全く一致しているので、「前太平記」の祖述ということは確かであった。その態度・方法は、上方の絵本もの読本作者や高井蘭山などいう一部の江戸の絵本もの作者の態度・方法と全く一致しているといえた。

そして「源氏一統志」初輯の記述範囲は、「前太平記」の巻一から巻十四の四までであった。ということは、源家濫觴の経基王から始まって、満仲致仕前までということで、頼光の活躍は全く見られないところで終っているわけであった。

「源氏一統志」といえば、すでに同一書名の書物が出板されている。「増訂国書解題」にも見えているが、青表紙・大本・十七巻で題箋には「中興源氏一統志」と見え、馬場信意の輯録によって正徳二年仲秋出板されているもの、信意の序文に、

―略― 一日書肆山岡友貞者。袖ニシニ来テ於盛長日記ヲ一而曰ク。雖下吾レ蔵ニ此ノ書ヲ積年ナリト上。惜イカナ哉朽テ干箱中ニ一而永ク湮滅セン一ヲ乎。願クハ者欲スト下其レ是ニ正之ヲ一寿フセント上レ梓ニ。余反ニ覆スル一之ヲ一数月。鎌倉右幕下一世ノ之事跡ニ如シレ指ル掌ヲ。可謂ツ至レリ矣尽セリト矣。於テレ是ニ艾リニ其ノ繁ヲ一補フテニ其ノ缺タルヲ以テ成シニ十有七巻ト一命ケテ曰フニ源氏一統志ト一者

と、その成立過程を説く。内容もこの序のごとく、源頼朝の誕生から逝去までの記述に終始しており、金水の「源氏一統志」とは全く無関係のものであった。

いずれにせよ、金水の「源氏一統志」は、〃初輯〃とある以上続編を予期していたことは確実であった。その第二輯は何であったか、いうまでもなく「頼光朝臣勲功図会」がそれであったのである。「頼光朝臣勲功図会」の内容を検するに、「源氏一統志」と全く同じ方法と態度とで「前太平記」を底本として祖述しているはもちろんとして、前編五巻の内容は「前太平記」の巻十四の五から巻廿まで、後編五巻の内容は「前太平記」の巻廿一より巻廿八の一までであり、柱心によるまでもなく「源氏一統志」第二輯として記述されていたものであった。「源氏一統志」初輯の出板が弘化三年だとすれば、嘉永五年まで六年間という出板年時の近似という点から、もはやその時点では第二輯も出来上っていたのかも知れなかった。出板書肆や金水の思惑では、「源氏一統志」第二輯・第三輯という具合に、丁度続きもの読本のような形で出板し続けるつもりであったように推察できるのである。挙例するまでもなく、当時はこ

うした形での続きもの読本は数多かったのであるから。

ではなぜ「頼光朝臣勲功図会」と改題して大本仕立てにし、やや時機を失していたからとはいえ、続きもの読本としてではなく出板しなくてはならなかったのであろうか。

四

〃図会〃という以上大本仕立てにするのは当時の常識であったからそれはそれとして、「頼光朝臣勲功図会」の題名はどこから思い付いたのであろうか。すでに「源頼光勲功記」六素拙散人正徳六年刊 という酷似した題名の先行作品があったけれど、内容的には全く無関係といってよかったから、その題名を借用したのではなかったであろう。とすれば、〃図会〃とあるところに焦点があるとしてよかった。

幕末に続出した上方の図会ものを見るに、

○楠正行戦功図会 前編五 後編五 山田西村 意中和画 文政四年刊 文政七年刊

○義経勲功図会 前編五 後編五 山田西村 意中和画 文政八年刊 文政九年刊

○義仲勲功図会 前編五 後編五 山田有阪 意斉斉画 天保三年刊 天保七年刊

などいった、武将の名＋勲功（戦功）＋図会という形式を持った題名が、幕末期上方における最有力の図会もの作者である山田意斉の作品の中に見出せた。当然「頼光朝臣勲功図会」という題名の原拠もここにあったとしていいであろう。「前太平記」によって書いた「源氏一統志」第二輯であったが、図会もの化して出板しなくてはならなくなった松亭金水もしくは書肆金幸堂は、第二輯の中心人物である源頼光を題名にもってくることによって、体裁上だけではない上方風図会もの化の完成を企図したわけである。

こうして見てくると、江戸読本の上方化という現象が指摘されてくるであろう。幕末期における上方の図会もの出板の盛行が、江戸の読本の図会もの化をうながしたわけである。上方の図会もの化することが、「源氏一統志」第二輯として売り出すよりも売れ行きがよいと判断せざるを得ない客観的状況が存在していたといえるのである。

かつて一度引用したことがあるけれど（注五）、「頼光朝臣勲功図会」の作者である江戸人松亭金水が、「絵本阿佐倉日記」初編五歌川貞秀画嘉永五年刊 の序文で、

忠勇阿佐倉日記自叙

稗史小説廃ヲ二于江都ニ一而損坂大ニ行ル矣於レ是浪華書賈不レ厭ニ於遠ヲ一訪ニ於茅舎ヲ一也委ル「レ之ヲ若干巻焉多年之拙工猶不レ捨ラレ焉看官競ヲ開ク二於巻ヲ一也頗似リ輿ニ於面ヲ一而モ得ル二遠境之寵ヲ一耳喩フ二之ヲ草木枝葉繁茂シ根却ヲ枯ル一則不レ能レ無「ニ」遺憾一矣然這般寶集堂託スニ阿佐倉日記稿ヲ一為ルニ其書一也去歳辛亥當時流行之雑劇也既受ク下或人著ニ小冊子一頻婦幼之愛翫ヲ上矣是以書賈以一為ラク稗史益有ンレ栄乎ト則事ノ及フレ焉ニ余欣然トシテ採リレ筆ヲ對シテ机案ニ不レ隔ニ晝夜ヲ一先ツ案ニ地理一考ニ於人物ヲ一一編之趣向既ニ成ル矣雖レ然鄙俚猥雑實ニ燈下之戯墨也非スニ有レ所レ取者ニ一只以ニ勧懲之意存ルヲ一而モ漫リニ欲ルヽ免シト下費スニ梨棗ヲ一之譏ヲ上而已矣

嘉永壬子仲秋望

積翠陳人保題并書

と、江戸の現状を慨嘆している。化政の盛時には〝江戸の花〟（「南總里見八犬伝」の板木が上方の書肆に買い取られた時の江戸人の嘆きとして伝えられた言であるが。「近世物之本江戸作者部類」）とまで謳われた読本が、幕末期にはその主導的役割を上方に奪われていることを示したものといえるのである。事実、幕末期の読本出板の実状を見ると、読本の中心的存在である稗史ものも、続きもの読本として上方で多く出板されており（作者は金水の前掲序文からもうかゞえるごとく江戸作者がほとんどであるが）〔注六〕、元来上方で盛行していた絵本ものも史伝的長編続きものとして盛んに売り出され〔注七〕、その文学性は問わず出板部数の面からだけいえば、再び読本の中心が上方に移動したかの観さえ呈示していたのである。もちろん図会ものも、山田意斉の作品を中心として幕末期に上方へ姿を現し、寛政末年から文化初年にかけての図会もの前期以上の盛況を示していたことは既に説いたところであった〔注八〕。

このように見てくると、決して源頼光の事蹟を中心に記述することが目的ではなかった「源氏一統志」第二輯を、たまたま中心的人物が頼光であったから、その名を利用して上方の図会ものに類似した名題を付し、外的体裁も一応図会もの化して出板したところには、明らかに上方の出板界の動向に追随している姿勢が観取できるのである。

山東京伝の「忠臣水滸伝」前編五寛政十一年刊　の大当りから化政の読本全盛期に至るまで、読本展開の主導的役割を果してきた江戸の出板書肆が、いつしか上方の出板書肆の動向をうかがうことになっていたのである。こうした江戸における読本の衰退現象は、文政末年から除々に顕在化していたけれど、天保の改革を経て、さらにいえば読本の大御所的存在であった曲亭馬琴亡き後（嘉永元年十一月六日没）、もはや決定的といってよかった。その肩代り的役割を、上方の書肆は、商業政策上積極的に推進していたといえようか。

五

「頼光朝臣勲功図会」は、当初図会ものに仕立てて出板するつもりのものでなかったことはすでに述べたとおりであるが、一方江戸作者・江戸書肆の手によって最初から図会ものとして企画されたものもあった。年表に

○平家物語図会　前編六　高井蘭山　有阪蹄斉画　文政十二年
○平家物語図会　後編六　高井蘭山　有阪蹄斉画　嘉永二年

と見えるのがそれである。

所見全て嘉永二年に前後編まとめて出板したものとおぼしく、文政十二年刊本の前編を見得ないでいるが、嘉永二年刊本にも原刊記が付してある。その刊記を見ると、

江戸　高井蘭山翁校合　山下可志麿浄書
江戸　有坂蹄斉翁画図　朝倉伊八彫刻
平家物語図会　全部十二巻出来
文政十二丑年春日発兌
書林　京都　伏見屋半三郎
摂陽　河内屋茂兵衛
江戸　大坂屋茂吉郎

とある。これに続いて最後の丁に、刊年を記さない三都書肆連名の

刊記が付されている。京は河内屋藤四郎、江戸は須原屋茂兵衛以下八書肆（大阪屋茂吉郎の名は見えない）、大阪は河内屋藤兵衛・河内屋茂兵衛、計十一書肆名が並んでいる。

後編は、前編に見られなかった見返しに、

高井蘭山先生校正
有坂蹄斉先生画図
平家物語図会　後編全六冊
浪華書肆　岡田群玉堂
　　岡田群鳳堂

と見え、刊記は著者名など前編とほぼ同じに書かれた後、

嘉永二年己酉九月発兌
書　大阪　河内屋茂兵衛
　　仝　　河内屋藤兵衛
　　林　江戸　大坂屋茂吉郎

と見える。最後に、前編と同じく刊年なしの十一書肆連名（英大助を欠き、和泉屋吉兵衛を加える。その意味するところは不明であるが、恐らく全く同時期に出板したのではないことを示していよう。）の刊記を有する。

前編の序文には〃文政九年丙戌夏至〃の年時が見え、後編の序文には〃文政丙戌仲秋既望〃の年時が見える。前編の高井蘭山の自序に、

一畧一今為二児女子一誌二平家物語図会十二冊一。読人冀弃二怪異説一。採二真面目一。有二温レ故之一助一云。

と見え、後編の它山処士の序文に

一畧一刻已成。不レ容レ無二緒言一。書賈文魁堂為レ之来謁。余於レ是乎道レ乎。

とも見える。

大よそ以上の書誌的事実をもとにして、この「平家物語図会」前後編の出板事情を考えてみると、次のようになろうか。

文政四年に「楠正行戦功図会」前編五　が山田意斉の手によって造られ出板されてから、上方で再び図会もの出板の機運がきざし始める。その機運をすばやく察知した江戸の書肆文魁堂大坂屋茂吉郎は、本造り（注九）の名手である高井蘭山に依頼して「平家物語」の図会もの化を企画する。前期図会もの作者秋里籬島が「源平盛衰記」「保元物語」「平治物語」「前太平記」という具合に軍記物語の多くを図会もの化しているにもかかわらず、語りや講釈などで一層広く民衆に親しまれていたはずの「平家物語」の図会もの化が果されていなかったことに着目したのであろう。

このような準商業政策的発想が大坂屋茂吉郎から出たのか高井蘭山から出たのか、今知るすべもないのであるが、大坂屋茂吉郎といえば、「世物之本江戸作者部類」に

三国一夜物語五巻、こも亦その板、文化丙寅の火にて烏有となりぬ、文政中、越前屋長二郎（筆者注・為永春水）、又悉に其出像を新にし、文を増減して、再刻を大坂屋茂吉に委ねたり、

とある書肆で、馬琴が非難して止まなかった為永春水の商業道徳に反する行為の片棒をかつごうとしたほどの者であって見れば、相当目端の利く出板書肆であったことが想像できるから、大坂屋茂吉郎の主導的役割を想定してよかった。

大坂屋茂吉郎の依頼を高井蘭山が何時受けたかは知るすべもないが、恐らく依頼されて早々、文政九年の夏至には全十二巻の執筆を終り、仲秋には板木も完成に近いという有様であったであろう。

「平家物語図会」の内容を見るに、後編の序文に

―畧―頃者高井某。就二平家物語一。節二取其菁華一。浅二其文一俗二其辭一。加以二図絵一。便二於婦女児験之観覧一。―畧―

とあるをもって判るごとく、「平家物語」の抄録のごときもの、それも単純な簡易化に止まって、秋里籬島の図会ものに時に見られた人物像の近世的変更ということも見られないものであった。ただところどころ〃附けて云ふ〃とか〃他書には〃とか〃論者いはく〃とかいった形で異説を紹介する、節用集を編んでみたり漢籍の俗解書を書いたり仮名使いの手引き書を著したりしている蘭山の一面を示すともいえようか。しかしこの学者的態度も全く表面だけで、序文に長門本・八坂本・鎌倉本・嵯峨本などと多くの異本あることにふれているけれど、帰するところ一般流布の板本を利用しての本造りであった。証として一例、「平家物語」巻一〃祇王〃末文は、由緒ある写本類では〃あはれなりし事どもなり〃とあるがごとくであるが、所見の寛文七年刊本、無刊記平仮名本など〃難レ有カリシ事共也〃とあるに対し、「平家物語図会」の同じ箇所も〃有がたかりし事にこそあれ〃とある。如上の例は、精査すればいくらでも追加できるようであるから、蘭山の図会もの化の姿勢は極めて一般的「平家物語」の板本を利用しての抄録ということであった。当然、この大部分の作品を早々のうちに造りあげたというのも、決して不自然なことではなかったといえよう。馬琴の読本執筆に見られるごとき刻苦勉励とは無縁な作業であったのだから。

ともあれほぼ文政九年中に〃刻已成〃ったという「平家物語図会」前編・後編が、文政十二年と嘉永二年とに出板された。前編の出板が三年ばかりのびている理由は不明であるが、こういう事例はしばしば存在したこととて今問わないにしても、前後編とも成刻していながらその出板の間に十年以上の歳月が流れているのは不審というべきであろう。まず考えられるのは、前編の世評が高くなかったということで後編の出板が延期されたという事態である。次いで書肆大坂屋茂吉郎の死没（「近世物之本江戸作者部類」によると文政年中に亡くなったようである。）ということで、出板手続きに停滞を生じたという事態も考えられた。しかし今それらを証する手懸りはない、それよりも前編・後編出板の間に板木の売り渡しが行なわれたのではないかと思われることは注目される。後編見返しに文魁堂の名が見えなくて、上方の二書肆の名だけ見られること、十一書肆連名の巻末刊記にも、大坂屋茂吉郎の名は見えないこと、さらに嘉永三年刊の「大伴金道忠孝図会」後編巻末広告（刊記には東都書肆大島屋伝右衛門・浪華書林河内屋茂兵衛との書肆名がある。）に、

高井蘭山先生校正
平家物語図会　前編六冊
有坂蹄斉先生画　後編六冊　出来

と広告していることなどから、大坂屋茂吉郎の死という予期せぬ出来事から生じたことかも知れなかったけれど、前後編ともどもの板木の江戸から上方への移動ということが考えられた。そして嘉永二年という時点を軸として、当時の上方でもっとも有力な書肆の一つであった河内屋茂兵衛を中心とし、前編・後編と時間をあまりへだてずに出板したと想定してよかった。

とすれば、上方書肆の読本（図会ものと限定すべきか。）出板に関する極めて積極的姿勢が浮き彫りされると同時に、江戸書肆の読本出板に対する意欲の衰退を観取せざるを得ないのである。

このようにして、「頼光朝臣勲功図会」の出板事情に加うるに

「平家物語図会」の出板事情を重ねてみる時、幕末期における読本―少くも図会もの出板に関するかぎり、江戸に対する上方出板界の積極性・優位性を説いてよかった。「忠臣水滸伝」出板以後の読本出板に関する在り方が、ここにおいて逆転しているのである。ただそこに見られる読本は、図会ものの造り方に象徴されるごとく、全く後向きの姿勢で終始しており、そこには新しい創造の芽を見出すことはできなかった。これも、資本力はあっても新しい作者を産み出そうという努力を怠った上方書肆であってみれば、当然の結果といわなくてはならなかった。

六

読本界における上方書肆の積極的活動について、図会ものを一つの例として述べたのであるが、それは幕末期における小説界全体の動向をそのまま反映したものとはいえなかった。読本の代表作者である馬琴自身〃曲亭の読本数千種、新奇尠からずと雖、就中弓張月、南柯夢、八犬伝を三大奇書と称せらる、侠客伝又これに亜で、続出すを待つもの一日三秋の如しといふめり、文政以来、読本の流行既に衰へしより、他作は出るも稀なるに、曲亭の一作のみ、今に至て盛にして、年に月に看官に待るゝこと右の如し〃（「近世物之本江戸作者部類」傍点筆者）という、例の自己顕彰のための誇張はあるとしても、文政以降の読本界の低調を伝えて一面の真ありとしてよいであろう。とすれば、文化五・六年を中心とする江戸読本全盛期の読本読者層はどこに吸収されていったか、決して上方の絵本ものとか図会ものとかの読本読者と化したわけではなかったであろう。

小読読者の上層と規定される（注十）第一級の読本読者は、曲亭馬琴の天保末年にまで至る旺盛な読本著作活動の強力な支持者として存在し続けるが、文化初年の中本ものとか数多い片々たる仇討もの読本とかの読者層は、十返舎一九から始まって為永春水や鼻山人などによって展開された人情本の読者として吸収されていったと推測された。文政初年から中本ものが人情本へと変質展開していった過程を追えば、（注十一）その間の事情は納得できるであろう。

また天保の改革による人情本の全滅に当って、人情本の読者層が合巻の読者へと変転していった（注十二）とならば、ここに文政から幕末にかけての第一級の読本読者以外の数多い読者層の動向を跡づけることができよう。この読者層の動向は、寛政以降文運東漸によって、従来の地域的色彩を脱却して成立した江戸中心の近世日本文壇における小説の主流が奈辺にあったかを、同時に物語っているといえよう。

幕末において、図会もの、さらには絵本ものや稗史ものの続きもの読本、また江戸読本の板木を買収しての後刷本の出板など、上方書肆の読本出板活動は華々しいけれど、所詮当代の小説界の主導権を握ることはできなかったし、次代の新しい文学を生み出す胎動ともなり得なかったのである。

注一・拙稿「後期読本群の一分野―『図会もの』について―」（国文学攷・第廿二号）、「図会もの補説―山田意斉の読本をめぐって―」（国文学攷・第廿九号）参照。

注二・書名は、見返しに「頼光勲功図会」と見え、序文には〃題ニ頼光朝臣紀事ニ〃とも見えているが、本文巻頭の標題に「頼光朝臣勲功図会」とあるので、小説年表のままに従った。

なお序文によると、前編五は嘉永四年、後編五は嘉永五年である。刊年不明ながら、前後編別々に出板されたものかも知れない。後編序文に、

—畧—まづその巻のはじめのかたを。すりかたきにゑらせたりしに。人みないたくめでよろこびつゝ。残りのまき〳〵をも見まくほしうすめれバまたさらにそれがつゞきを。かうさまにてうじつるなるべし—畧—

と見える。

注三・拙稿「中本もの書目年表稿」（近世文芸・第十七号）参照

注四・管見の範囲でいえば、

○賢女全伝　千代物語　前編五　鼻山人　後編五　溪斉英泉画　文政十年

のみが、初刷本に半紙本型があった。というより、板型は中本であるのに、初刷本でも中本のもの未見である。

注五・拙稿「続きもの読本の一様相—上方読本の流れにそって—」（「広島大学文学部紀要」第廿七巻一号）参照

注六・注五拙稿参照。

注七・拙稿「幕末期絵本もの読本の一様相—続きもの読本と関連して—」（「近世文芸稿」第十三号）参照

注八・注一拙稿参照。

注九・浜田啓介氏「造本とよみもの—ある視点とその諸問題—」（「国語国文」第二七三号）参照

注十・中村幸彦先生「読本の読者」（「近世小説史の研究」所収）参照。

注十一・中村幸彦先生「人情本と中本型読本」（「近世小説史の研究」所収）参照。

注十二・前田愛氏「天保改革における作者と書肆」（守随憲治編「近世国文学—研究と資料—」所収）参照。

本稿は、昭和四十四年十一月三十日、日本近世文学会秋季大会（於宮島町）において発表した素稿を補訂したものである。御指導いただいた真下三郎先生と御蔵書の利用を許していただいた上御助言下さった中村幸彦先生に深く感謝申しあげます。

—広島文教女子大学助教授—